

# 特集

## 子供・若者の意識と 求める支援について

### はじめに

内閣府では、子供・若者を取り巻く諸課題に対し、子供・若者がどのように考えているのか、また、政府、地方自治体、民間団体等による子供・若者育成支援施策について、子供・若者がどのように考え、どのような施策を期待しているのかなどを把握し、今後の子供・若者の育成支援に関する施策の参考とするため、令和元（2019）年度に「子供・若者の意識に関する調査」（満13歳から満29歳までの子供・若者を対象としたインターネット調査。図表1<sup>1)</sup>）を実施した。

今回の特集では、この調査の結果から見えてくる、子供・若者の意識の特徴的な結果について、一部、過去の類似の調査の結果とも比較しながら、人生観・充実度及び他者との関わり方、子供・若者が抱える困難、社会参加の観点から紹介する。

図表1 子供・若者の意識に関する調査（令和元年度）の概要

調査目的	子供・若者を取り巻く諸課題に対し、子供・若者がどのように考えているのか、また、政府、地方自治体、民間団体等による子供・若者育成支援施策について、子供・若者がどのように考え、どのような施策を期待しているのかなどを把握し、子供・若者育成支援施策の検討の参考とすることを目的とする。
調査地域	全国
調査対象者	満13歳から満29歳までの子供・若者（10,000サンプル）
調査時期	令和元年11月から12月
調査方法	インターネット調査 （調査会社に登録しているモニターに対し、インターネットを利用して調査票を配信し、回答を依頼） ※13～14歳については、保護者に調査協力の可否を確認後、協力可能と回答した子供を対象
調査領域	(1) 人生観・充実度 (2) 子供・若者が抱える困難 (3) 他者との関わり方 (4) 支援機関 (5) 学校や職場以外で他者で行う活動 (6) 社会参加 (7) 将来像

## 1 人生観・充実度及び他者との関わり方について

### ア 自己診断

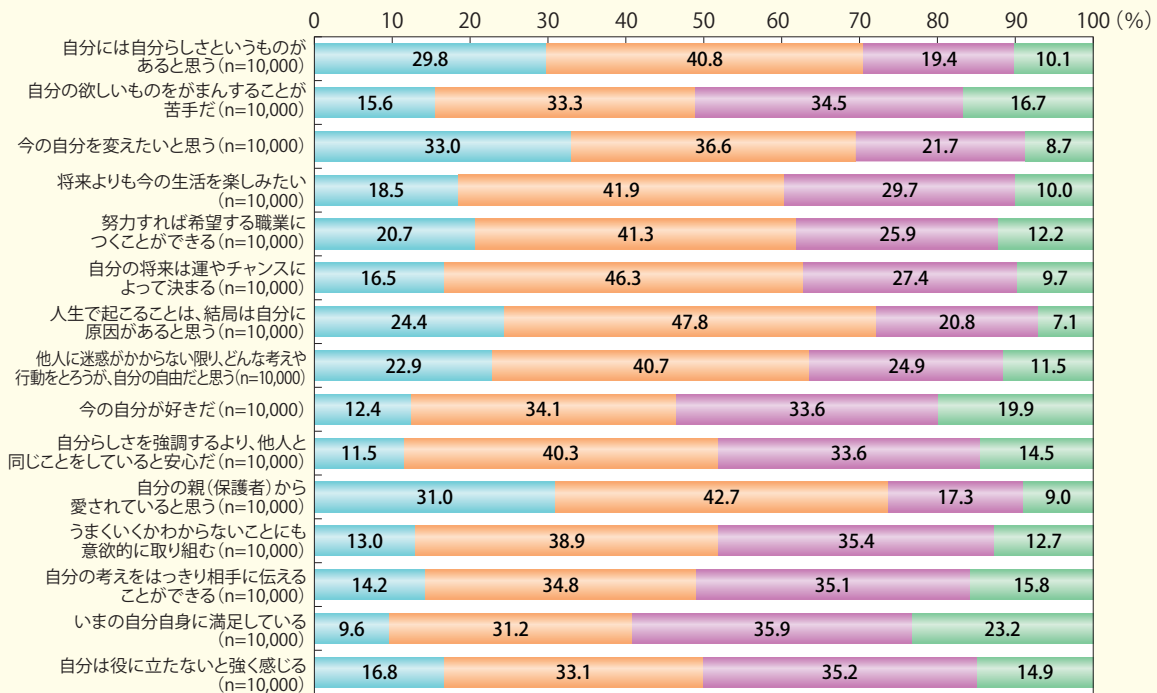
人生観・充実度について、まず、「あなた自身について、次のことがどのくらいあてはまりますか。」という質問に対する回答を見ると、「あてはまる」又は「どちらかといえばあてはまる」と回答した者の割合が最も高いものは「自分の親（保護者）から愛されていると思う」（73.7%）であり、次いで高いものは、順に「人生で起こることは、結局は自分に原因があると思う」（72.1%）、「自分には自分らしさというものがあると思う」（70.5%）、「今の自分を変えたいと思う」（69.5%）という結果となった。

1 調査結果の詳細は、「子供・若者の意識に関する調査（令和元年度）」報告書を参照。なお、報告書では、調査結果をもとに、次の3名の有識者による分析を掲載している。  
北海道大学大学院教育学研究院准教授 加藤 弘通氏  
中央大学文学部教授 古賀 正義氏  
国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター長 村上 徹也氏

平成28年度調査<sup>2</sup>と比較すると、「あてはまる」又は「どちらかといえばあてはまる」と回答した者の割合は、「自分には自分らしさというものがある」、「人生で起こることは、結局は自分に原因があると思う」、「今の自分を変えたいと思う」以外の項目において増加しており、「努力すれば希望する職業につくことができる」は4.4ポイント増加している。(図表2)

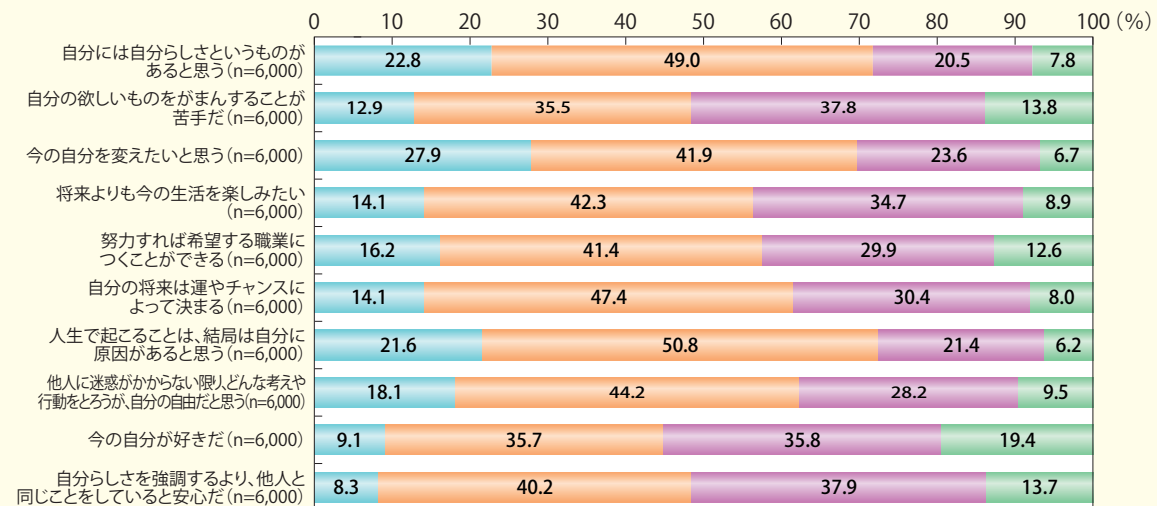
図表2 自己診断について

(令和元年度調査<sup>3</sup>)



あてはまる      どちらかといえばあてはまる  
 どちらかといえばあてはまらない      あてはまらない

(平成28年度調査)



あてはまる      どちらかといえばあてはまる  
 どちらかといえばあてはまらない      あてはまらない

2 内閣府「子供・若者の意識に関する調査(平成28年度)」  
 3 「自分の親(保護者)から愛されていると思う」、「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」、「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」、「いまの自分自身に満足している」、「自分は役に立たないと強く感じる」は令和元年度のみ聴取。

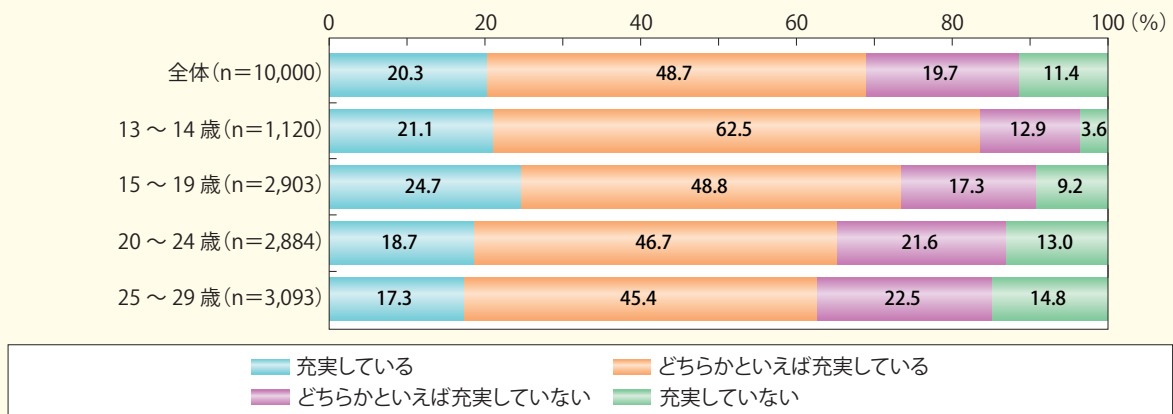
## イ 充実感

次に、「今の生活が充実していると思いますか。」という質問に対する回答を見ると、「どちらかといえば充実している」と回答した者（48.7%）が最も多かった。

また、「充実している」又は「どちらかといえば充実している」と回答した者の割合は68.9%であり、「充実していない」又は「どちらかといえば充実していない」と回答した者の割合の31.1%より高い結果となった。

年齢区分別でみると、「充実している」又は「どちらかといえば充実している」と回答した者の割合は、年代が若いほど高くなっており、13～14歳（83.6%）が最も高い結果となった。（図表3）

図表3 充実感について



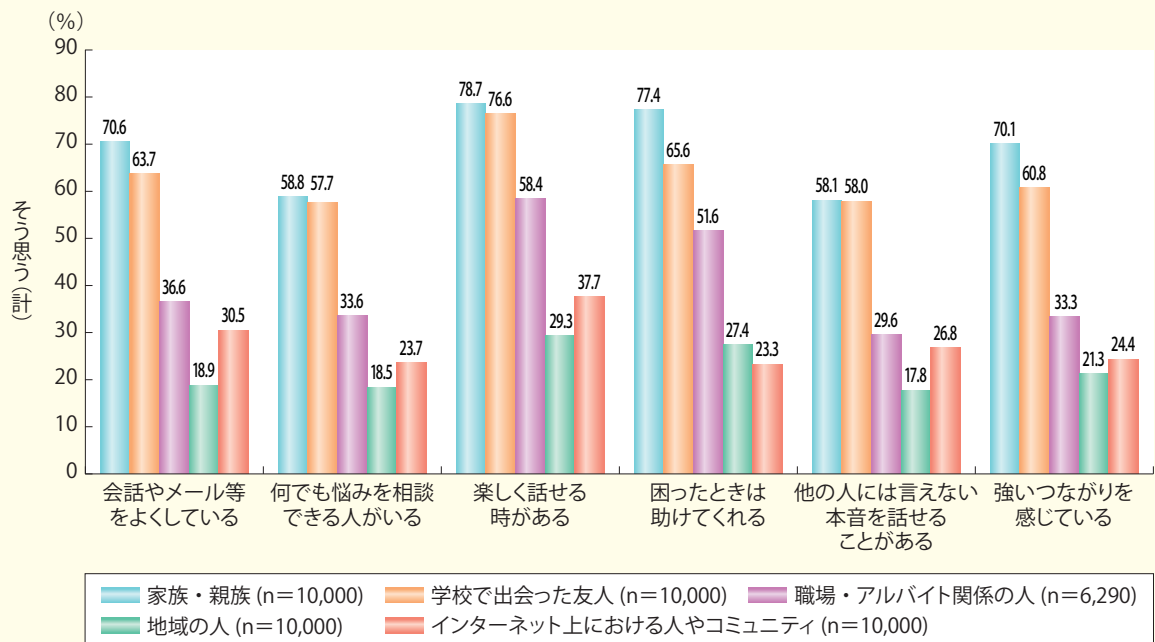
### ウ 他者との関わり方

また、「家族・親族」、「学校で出会った友人」、「職場・アルバイト関係の人」、「地域の人」、「インターネット上における人やコミュニティ」との関わり方として、「会話やメール等をよくしている」、「何でも悩みを相談できる人がある」、「楽しく話せる時がある」、「困ったときは助けてくれる」、「他の人には言えない本音話せることがある」、「強いつながりを感じている」という6つの項目について、それぞれ質問をした。

その回答を見ると、「家族・親族」との関わりが6つのいずれの項目も「そう思う」又は「どちらかといえばそう思う」と回答した者の割合が最も高い結果となり、次いで、「学校で出会った友人」との関わりが高い結果となった。

「地域の人」と「インターネット上における人やコミュニティ」を比べると、「困ったときは助けてくれる」の項目のみ「地域の人」が高い結果となり、それ以外の項目は「インターネット上における人やコミュニティ」が高い結果となった。(図表4)

図表4 他者との関わり方



※「そう思う（計）」は、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」の合計

以上のとおり、子供・若者の充実感については、年代が若いほど充実感も高い結果となったほか、他者との関わり方については、どの項目においても、「家族・親族」が最も関わりが強い結果となり、次いで、「学校で出会った友人」の関わりが強い結果となった。

## 2 子供・若者が抱える困難について

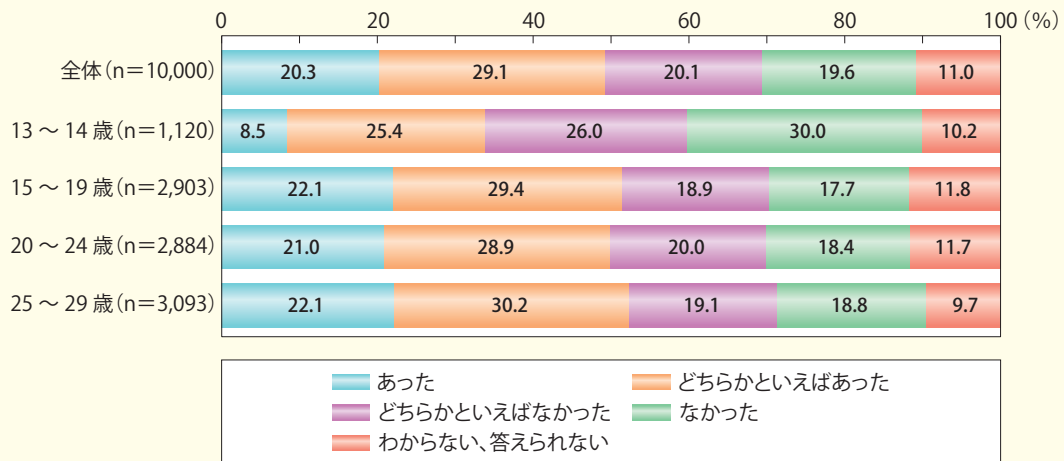
### ア 社会生活や日常生活を円滑に送ることができなかった経験

子供・若者が抱える困難について、まず、「今までに、社会生活や日常生活を円滑に送ることができなかった経験（以下本特集において「困難経験」という。）があったと思いますか」という質問に対する回答を見ると、「どちらかといえばあった」と回答した者（29.1%）が最も多かった。

また、「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者の割合は49.3%であり、「なかった」又は「どちらかといえばなかった」と回答した者の割合の39.7%より高い結果となった。

年齢区分別でみると、「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者の割合は25～29歳（52.3%）が最も高い結果となった。（図表5）

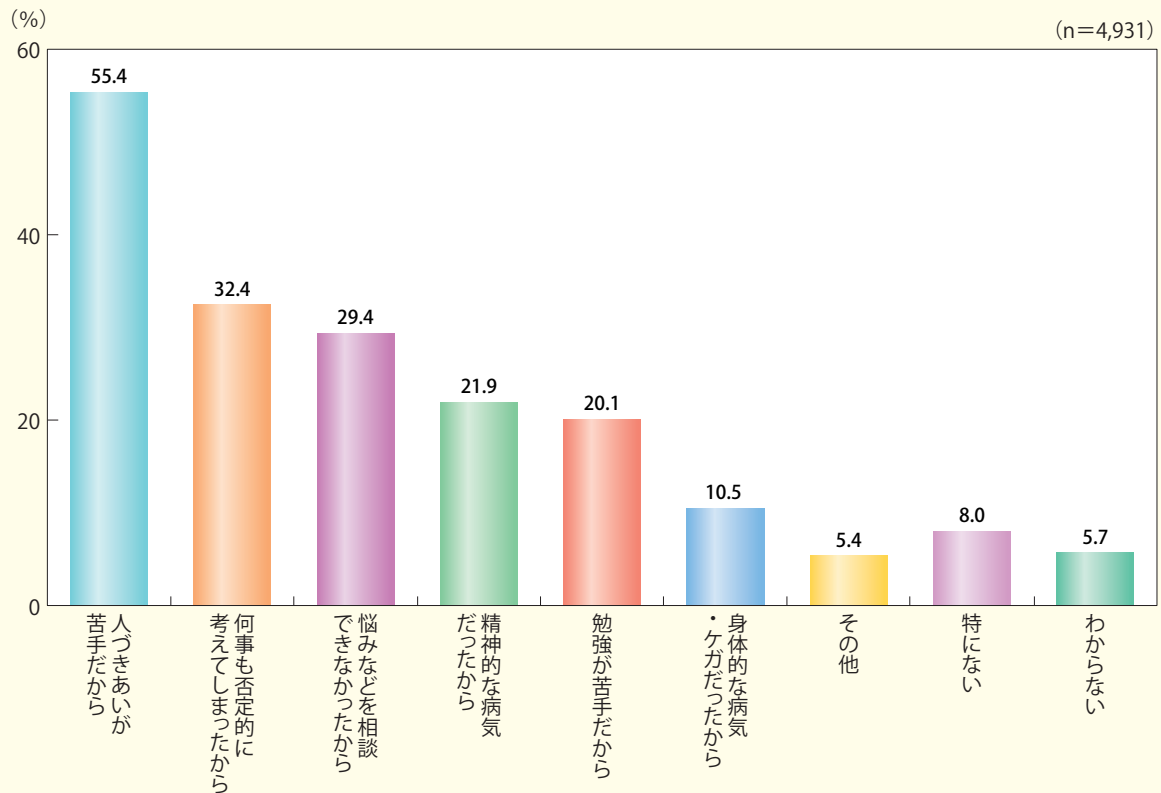
図表5 困難経験について



次に、困難経験について、「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者に対して、そうした経験をした主な理由について、「自分自身」、「家族・家庭」、「学校」、「仕事・職場」という問題ごとに分けて尋ねた。

「自分自身」の問題で全体で最も高いものは「人づきあいが苦手だから」(55.4%)であり、次いで高いものは、順に「何事も否定的に考えてしまったから」(32.4%)、「悩みなどを相談できなかったから」(29.4%)、「精神的な病気だったから」(21.9%)という結果となった。(図表6)

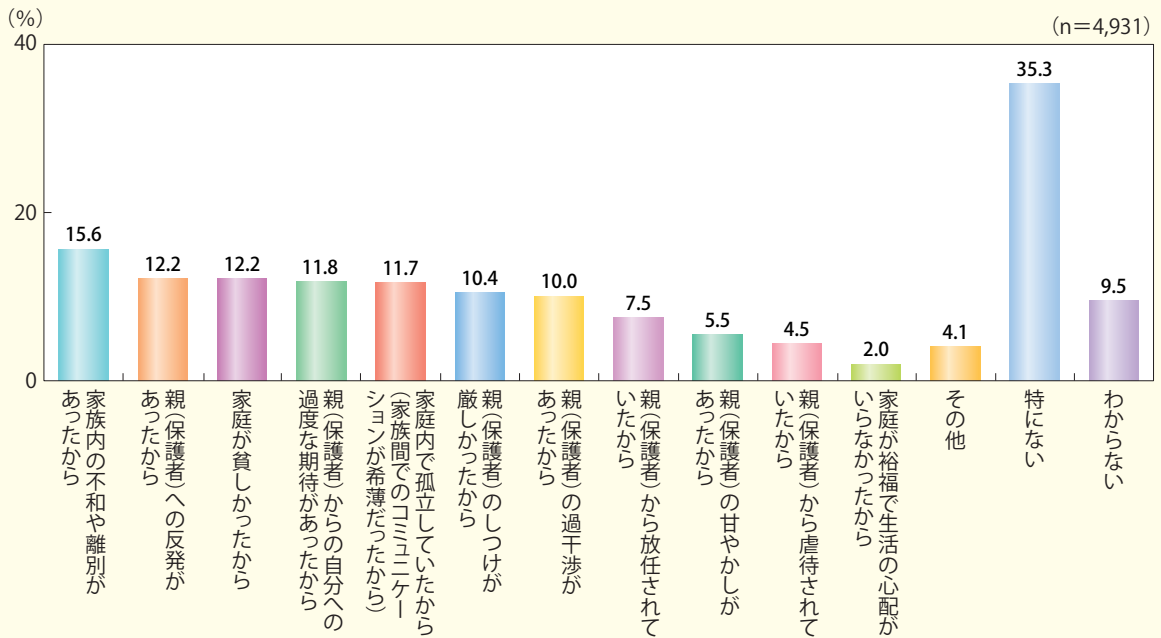
図表6 困難経験の主な理由（自分自身）について



※困難経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者のみ回答  
 ※選択肢は複数回答可

「家族・家庭」の問題で全体で最も高いものは「特にない」(35.3%)であり、次いで高いものは、順に「家族内の不和や離別があったから」(15.6%)、「親(保護者)への反発があったから」「家庭が貧しかったから」(12.2%)という結果となった。(図表7)

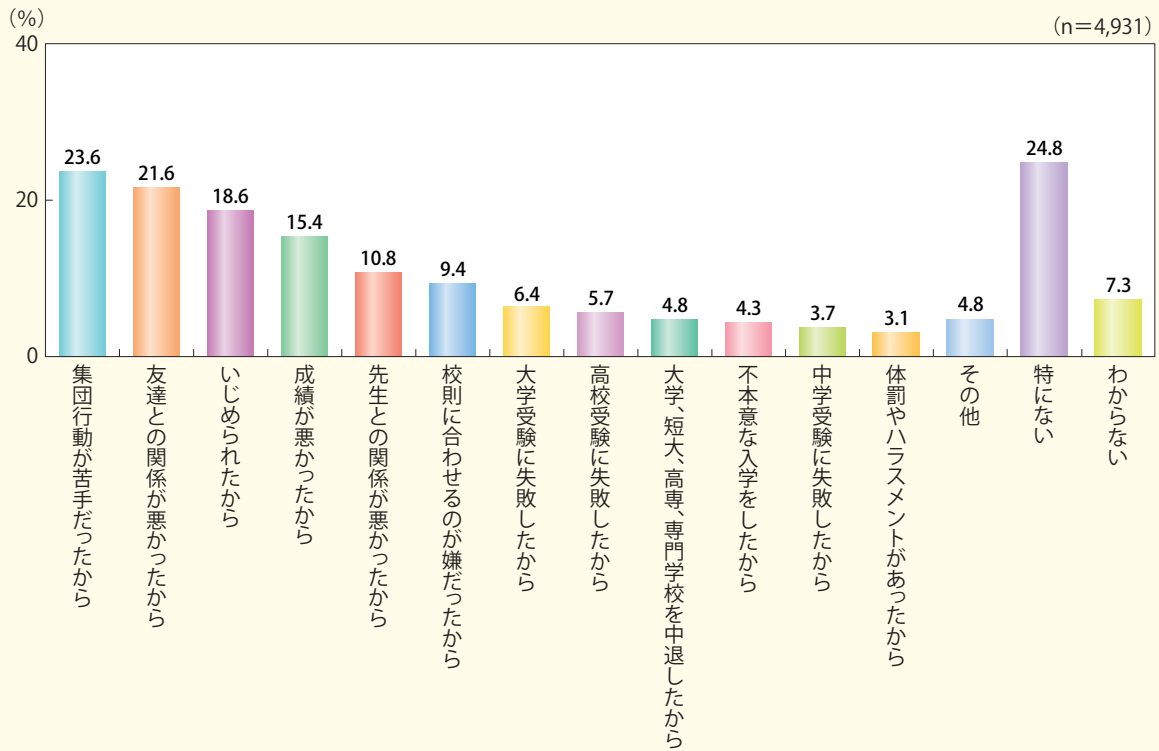
図表7 困難経験の主な理由(家族・家庭)について



※困難経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者のみ回答  
 ※選択肢は複数回答可

「学校」の問題で全体で最も高いものは「特にない」(24.8%)であり、次いで高いものは、順に「集団行動が苦手だったから」(23.6%)、「友達との関係が悪かったから」(21.6%)、「いじめられたから」(18.6%)という結果となった。(図表8)

図表8 困難経験の主な理由(学校)について

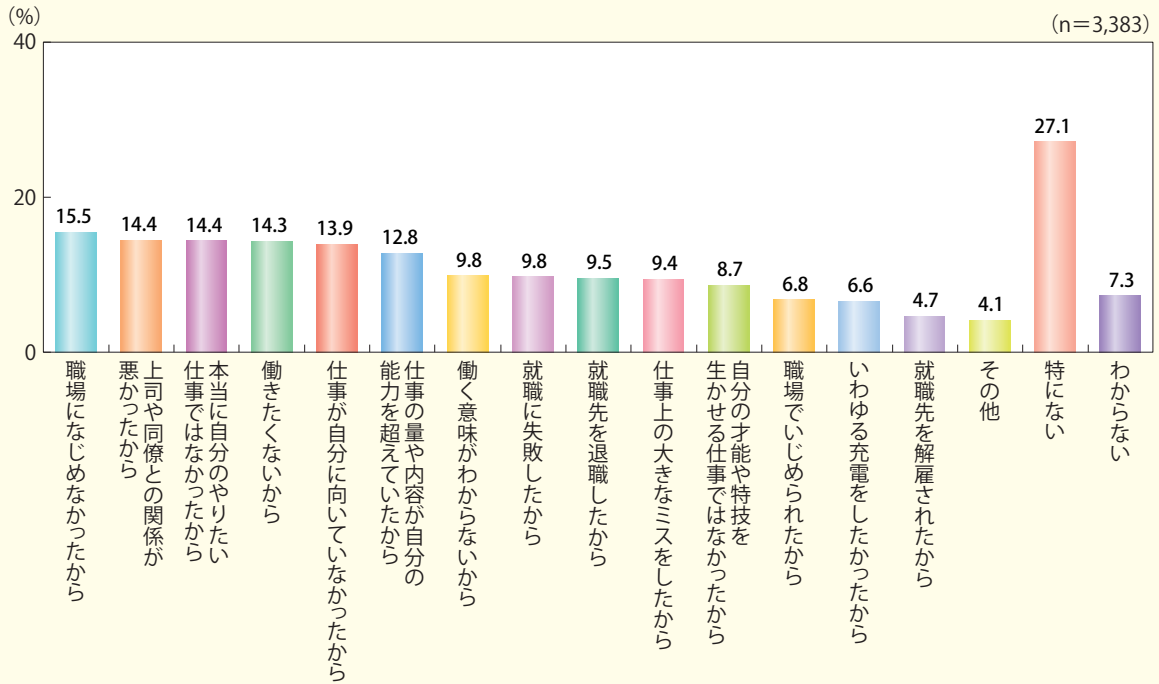


※困難経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者のみ回答  
 ※選択肢は複数回答可



就業経験がある者について、「仕事・職場」の問題で全体で最も高いものは「特にない」(27.1%)であり、次いで高いものは、順に「職場になじめなかったから」(15.5%)、「上司や同僚との関係が悪かったから」「本当に自分のやりたい仕事ではなかったから」(14.4%)という結果となった。(図表9)

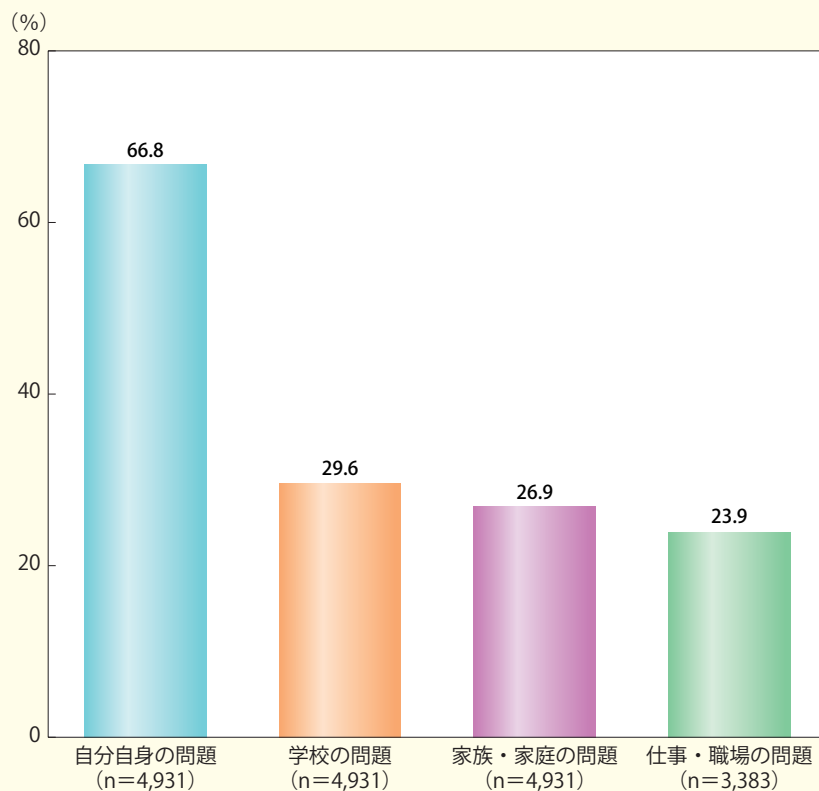
図表9 困難経験の主な理由（仕事・職場）について



※困難経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者のうち、就業経験がある者のみ回答  
 ※選択肢は複数回答可

また、「自分自身」、「家族・家庭」、「学校」、「仕事・職場」のうち、困難経験の主な理由として特に影響が強かったと思うことについて尋ねたところ、全体で最も高いものは「自分自身の問題」（66.8%）であり、次いで高いものは、順に「学校の問題」（29.6%）、「家族・家庭の問題」（26.9%）、「仕事・職場の問題」（23.9%）という結果となった。（図表10）

図表10 困難経験の主な理由として特に影響の強かったこと



※困難経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者のみ回答  
 ※「仕事・職場の問題」については、就業経験がある者のみ回答  
 ※選択肢は2つまで選択可

以上のように、調査対象となった子供・若者のうち約半数が、今までに、困難経験があったと思うと回答しており、その経験の理由については、人付き合いが苦手、何事も否定的に考えてしまった、悩みなどを相談できなかったなど、自分自身の問題の影響が特に強いと思っている者の割合が高い結果となった。

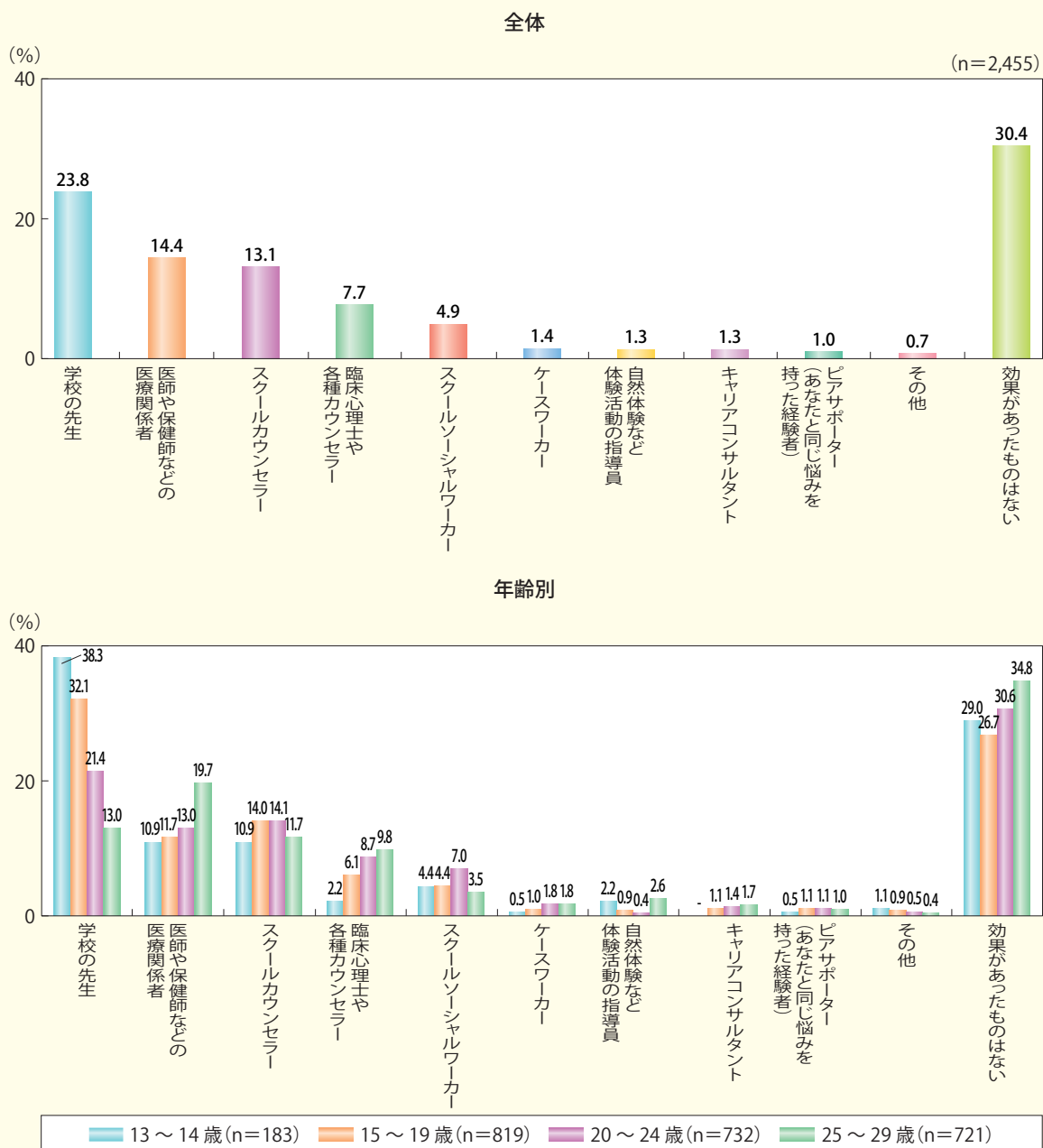
## イ 困難を抱える子供・若者への支援

さらに、困難経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した子供・若者のうち、今まで支援を受けたことがある者に対して、「その中で最も役に立ったと思うものを一つ選んでください」と尋ねた。

支援を受けた中で最も役に立ったと思う専門職については、「学校の先生」(23.8%)、「医師や保健師などの医療関係者」(14.4%)、「スクールカウンセラー」(13.1%)、「臨床心理士や各種カウンセラー」(7.7%)などが高い結果となった。一方、「効果があったものはない」との回答も全体では30.4%を占める結果となった。

年齢区分別でみると、「学校の先生」は全体と比べ、13～14歳(38.3%)が10ポイント以上高く、25～29歳(13.0%)は10ポイント以上低くなっている。なお、25～29歳では、「医師や保健師などの医療関係者」が19.7%と最も高い結果となった。(図表11)

図表11 最も役に立ったと思う支援(専門職)

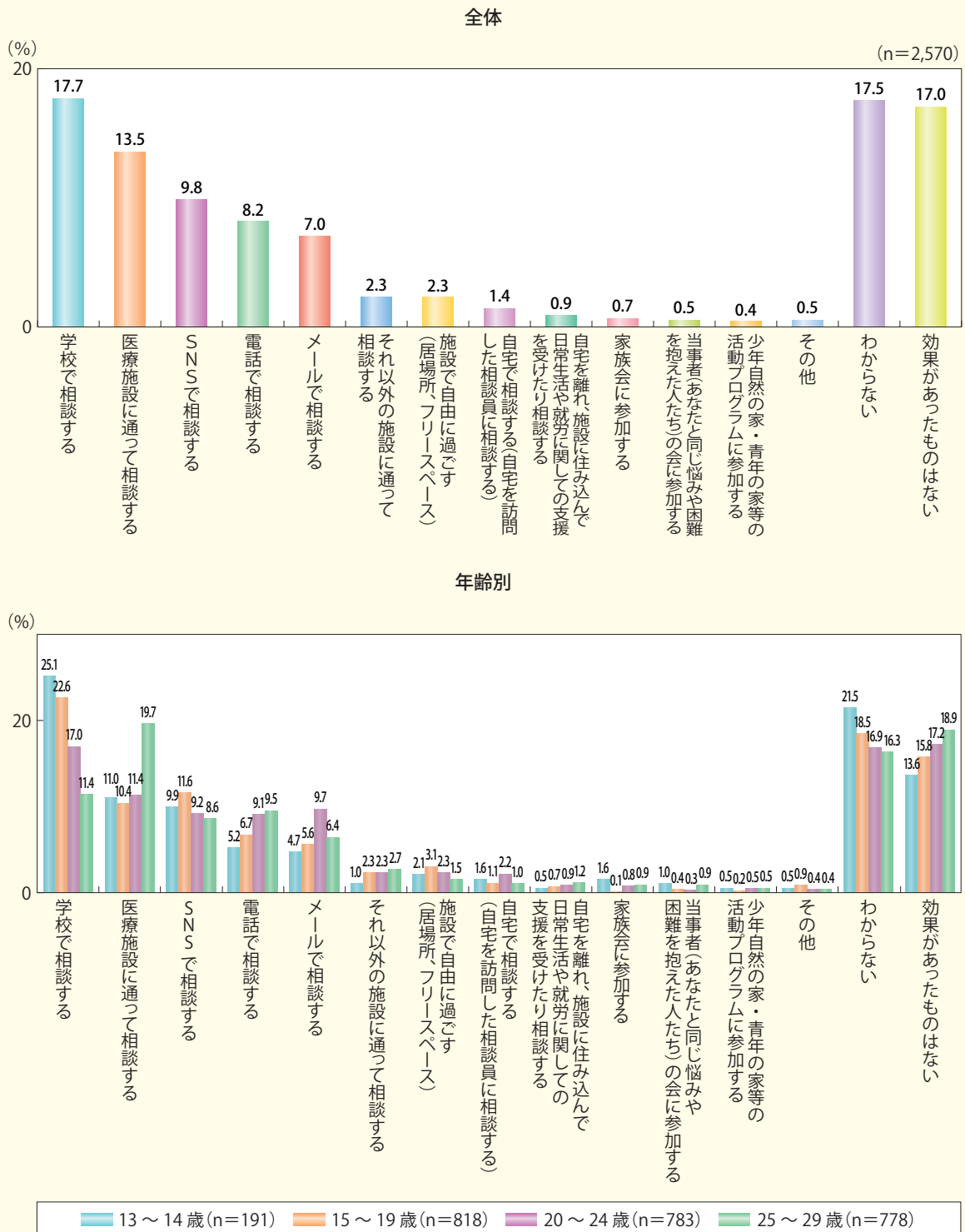


※困難経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者のうち、今までに上記の支援を受けた経験がある者のみ回答

また、受けたことのある支援の形態で最も役に立ったと思うものについては、全体で最も高いものは、「学校で相談する」(17.7%)であり、次いで高いものは、順に「医療施設に通って相談する」(13.5%)、「SNSで相談する」(9.8%)、「電話で相談する」(8.2%)という結果となった。一方、「効果があったものはない」との回答も全体では17.0%を占める結果となった。

年齢区分別でみると、「学校で相談する」は年代が若いほど高くなっており、13~14歳で25.1%、15~19歳で22.6%という結果となった。また、25~29歳では、「医療機関に通って相談する」(19.7%)が最も高い結果となった。(図表12)

図表12 最も役に立ったと思う支援の形態



※困難経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者のうち、今までに上記の形態で支援を受けた経験がある者のみ回答

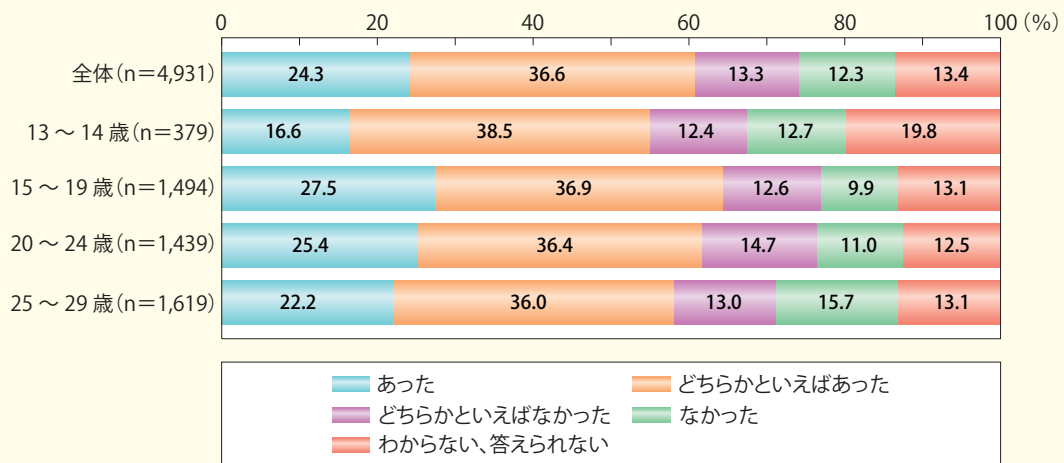
加えて、困難経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した子供・若者に対して、その状態が改善した経験があるか、そして、改善のきっかけは何かについて尋ねた。

「今までに、社会生活や日常生活を円滑に送ることができていなかった状態が改善した経験（以下本特集において「困難改善経験」という。）があったと思いますか」という質問に対する回答を見ると、「どちらかといえばあった」と回答した者（36.6%）が最も多かった。

また、「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者の割合は60.9%であり、「なかった」又は「どちらかといえばなかった」と回答した者の割合の25.7%より高い結果となった。

年齢区分別でみると、「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者の割合は15～19歳（64.5%）が最も高い結果となった。（図表13）

図表13 困難改善経験について

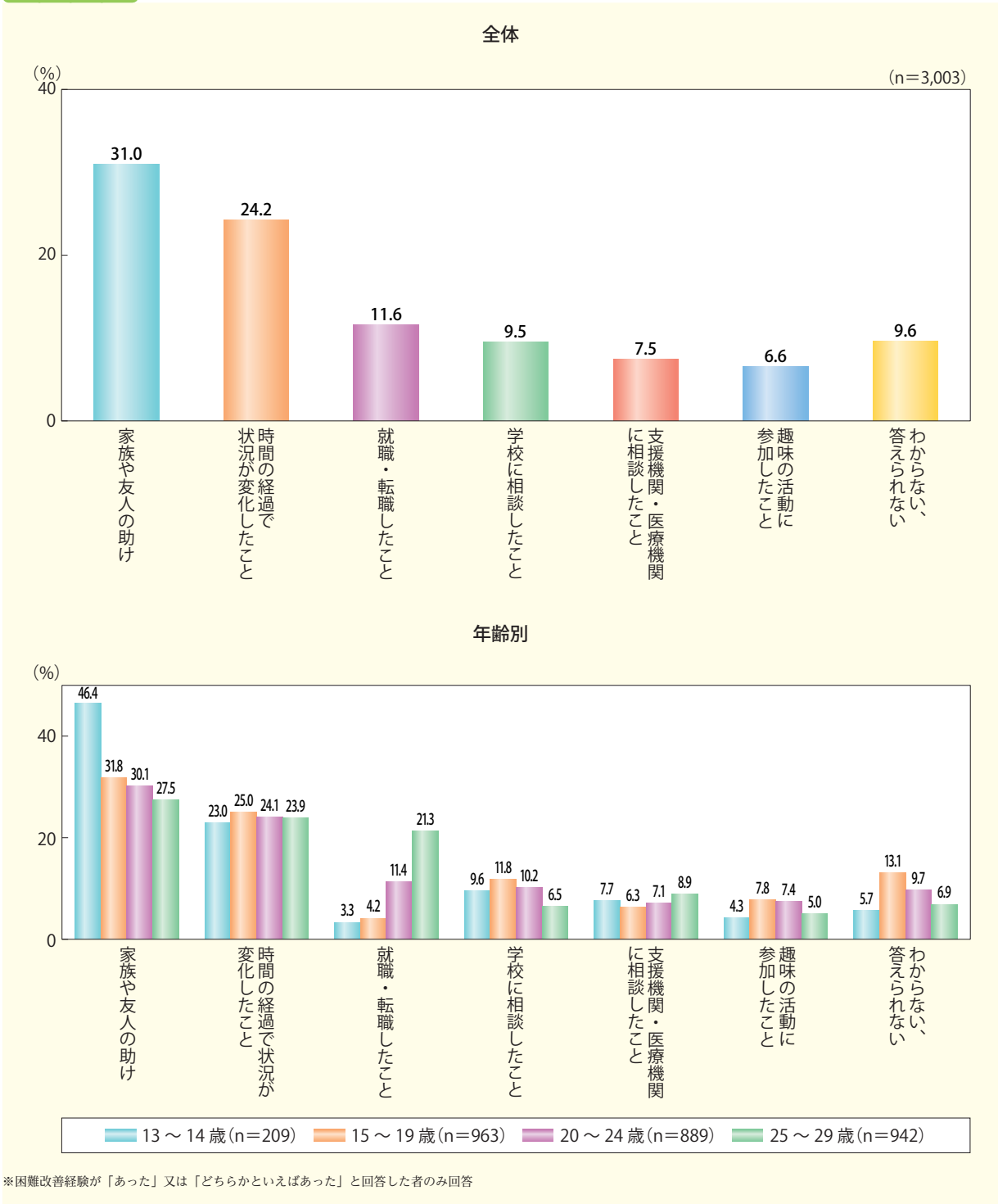


※困難経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者のみ回答

また、困難改善経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者に対して尋ねた「そのような改善した経験はどのようなことがきっかけだったと思いますか」という質問に対する回答を見ると、全体で最も高いものは、「家族や友人の助け」(31.0%)であり、次いで高いものは、順に「時間の経過で状況が変化したこと」(24.2%)、「就職・転職したこと」(11.6%)、「学校に相談したこと」(9.5%)という結果となった。

年齢区分別でみると、13～14歳は「家族や友人の助け」(46.4%)が、全体と比べ15ポイント以上高い結果となった。(図表14)

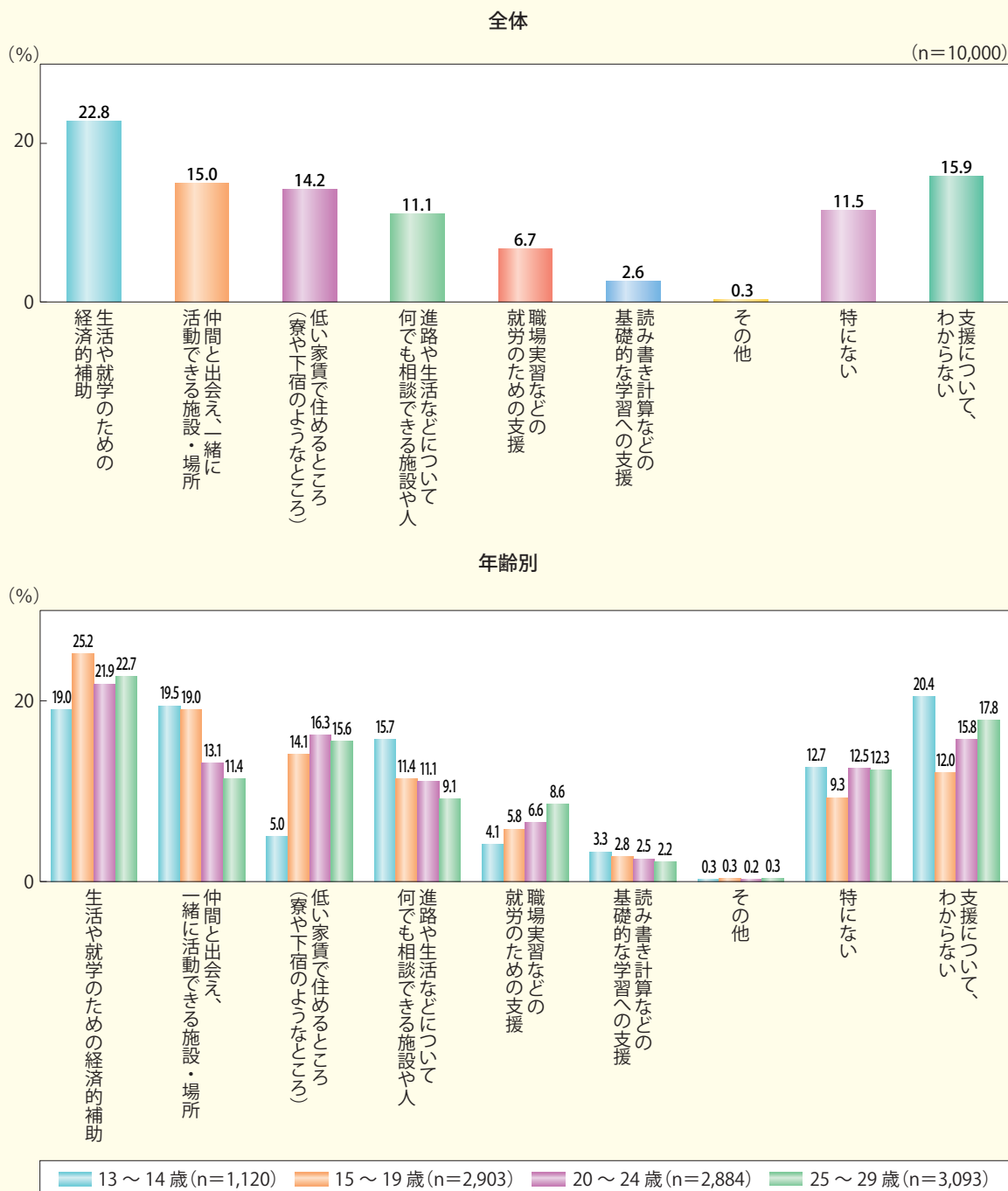
図表14 改善した経験のきっかけ



次に、調査対象者全員に対して尋ねた「社会生活や日常生活を円滑に送ることができないようなときに、どのような支援があると良いと思いますか。最も良いと思うものを1つ選んでください。」という質問への回答を見ると、全体で最も高いものは、「生活や就学のための経済的補助」(22.8%)であり、次いで高いものは、順に「仲間と出会え、一緒に活動できる施設・場所」(15.0%)、「低い家賃で住めるところ(寮や下宿のようなところ)」(14.2%)、「進路や生活などについて何でも相談できる施設や人」(11.1%)という結果となった。

年齢区分別でみると、13~14歳は「仲間と出会え、一緒に活動できる施設・場所」(19.5%)、「進路や生活などについて何でも相談できる施設や人」(15.7%)などが他の年代と比べて最も高い結果となった。また、どちらの項目も年代が上がるにつれて割合が低くなっている。(図表15)

図表15 社会生活や日常生活を円滑に送ることができないような時にあると良い支援

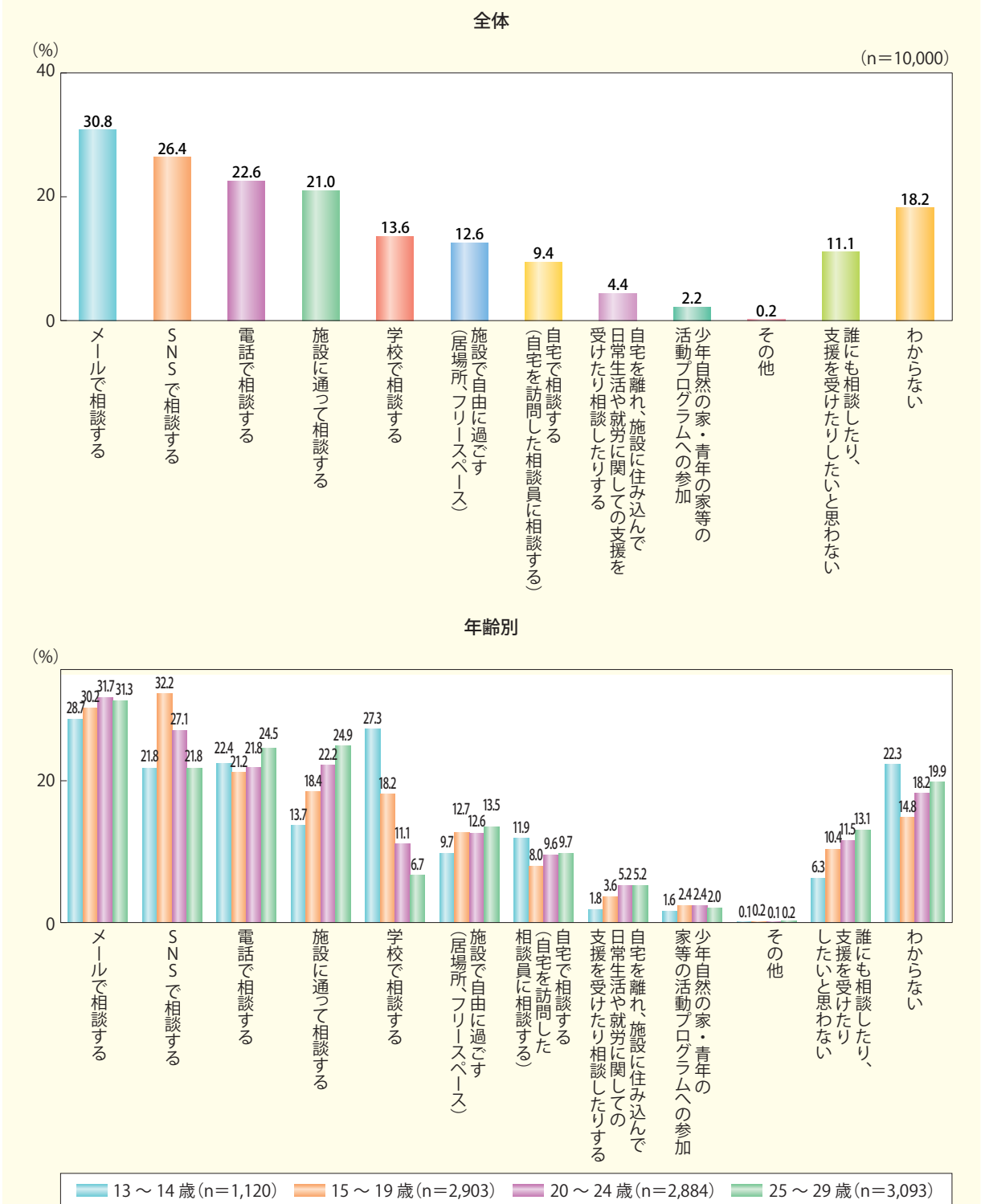


また、調査対象者全員に対して尋ねた「公的な支援機関や専門家から支援を受ける場合に、どのような形で支援を受けたいと思いますか」という質問への回答を見ると、全体で最も高いものは、「メールで相談する」(30.8%)であり、次いで高いものは、順に「SNSで相談する」(26.4%)、「電話で相談する」(22.6%)、「施設に通って相談する」(21.0%)という結果となった。

年齢区分別でみると、15~19歳においては、「メールで相談する」(30.2%)よりも、「SNSで相談する」(32.2%)の方が割合が高い結果となった。

また、13~14歳は「学校で相談する」(27.3%)が、全体と比べて10ポイント以上高い結果となったが、年代が上がるにつれて、割合は低くなっている。(図表16)

図表16 求める支援の形態



※選択肢は複数回答可